

真剣な学生には全力で応える それが江戸川大学の魅力です。

今年の3月、小川原咲さんは江戸川大学を卒業し、4月から産経新聞で記者として頑張っている。マスコミの最前線で活躍をする彼女に、母校江戸川大学についてお話を伺った。(文・片田正記)

「今は裁判所担当をしていて、裁判を傍聴して新聞原稿を書いています。それ以外にも、街のイベントや自分が興味を持ったことな

ら本格的な取材活動をまか

産経新聞社では、入社内定

立、といった有名大学がほ

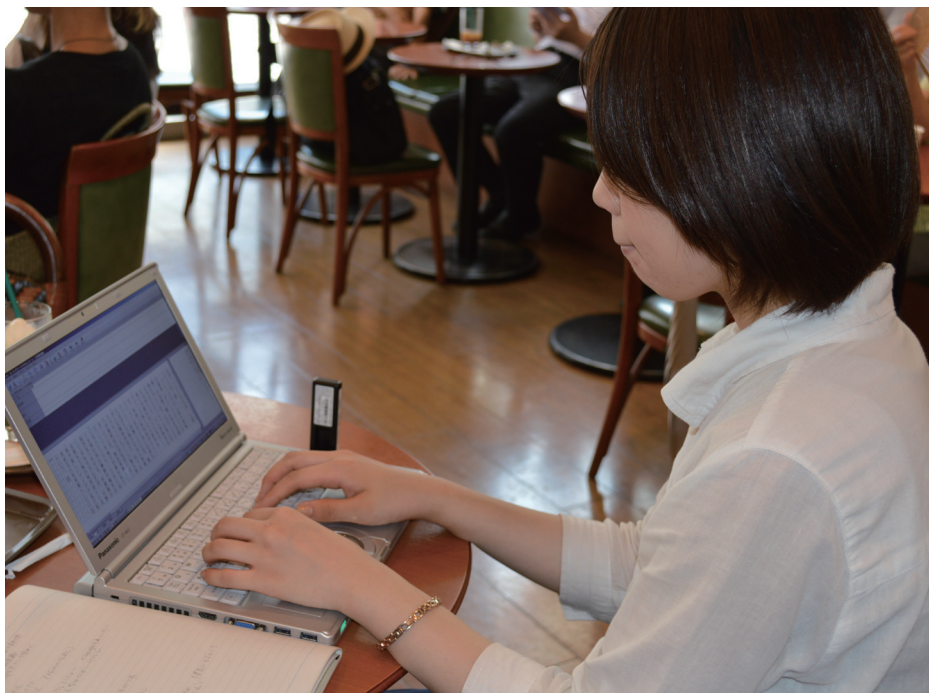
者の元に顔写真と大学名付

きの名簿が配られる。そこ

に書かれていた大学名に

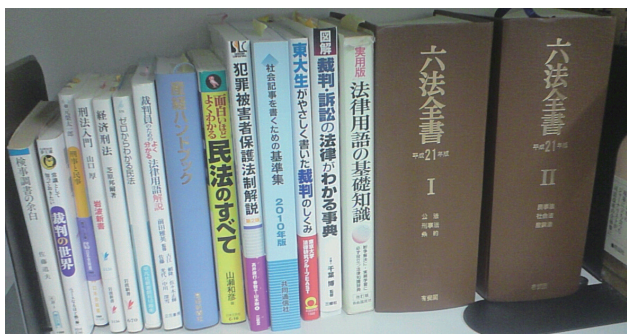
は、東大や早大、関関同

立、といった有名大学がほ



(上) 今年の春に卒業をし、産経新聞大阪本社 編集局社会部所属の小川原咲さん。

(右) 小川原さんのデスク。現在は裁判所担当なので、六法全書といった、法律関係の本が並ぶ。



とんで、江戸川大学だけ目立っていた。そのせいか、周りからは「小川原咲とは何者なんだ」と噂されていたという。小川原さんが、入社後同期から聞いた話だ。

小川原さんは江戸川大学に入学する前からマスコミ業界を志望していたという。「最初は音楽雑誌に興味を持っていました」。しかしそれは、ライターと編集者の区別もはっきりとは付かないぼんやりとした夢だった。

江戸川大学に入学後、マスコミ自主講座と出会った。学生同士がマスコミ業界について互いに教え合っている。マスコミ自主講座は授業ではないので単位が出ることはない。本気でマスコミを目指す学生たちが切磋琢磨していた。小川原さんは一年次から参加をし、リーダーも務めた。

マスコミ自主講座で指導してくれる先生たちはボランティアだ。ふだんは、マスコミ出身の先生たちが、基礎学力や一般教養などを鍛えてくれる。土曜日には、

出版社や新聞社、テレビ局現役のライターなどの講師を招いてお話を伺い素養を高める。そしてマスコミ業界への就職に活かすのがマスコミ自主講座の目的だ。

小川原さんは、大学以外の活動では、主に出版社と新聞社などのマスコミ業界への就職を志望していたので、日本新聞労働組合連合が主催をしている作文ゼミにも参加をしていた。作文ゼミではテーマを一つ決め、それに沿った作文を書き、ゼミ員同士で批評し合うというものだ。

「江戸川大学は学生と先生とが近い大学。マスコミ業界出身の先生も多いので、先生とどんなコミュニケーションすれば、マスコミ業界の生の声など、いろんなことをおしえてもらえます。真剣にマスコミ業界を目指す学生にはいい大学だと思えますね」。

これだけ先生と学生間の距離が近い大学はめったにない。おなじ夢をめざす学生と、そしてそれを支える先生たちとのコミュニケーションが彼女の夢をかなえたのだ。

「事実」と「真実」マス・コミュニケーション学科長大江志伸教授ミニコラム

新聞紙面の片隅にある『世界の天気』欄は必ず読むことにしている。各都市の気候を確認し彼の地で暮らす知人の安寧を祈るためだ。猛暑がピークだった8月中旬、某テレビ局が気温データを比べ「東京が熱帯のバンコクを超えた」と絶叫していた。確かだろうか。『世界の天気』欄を見直すと、タイの猛暑期は実は4月。8月は比較的涼しく「バンコク超え」は前から頻発している。データは事実でも真実ではない—そんな事例が溢れる時代だ。



大江志伸教授